

創価大学における池田研究の現状と課題

神 立 孝 一

1. はじめに

おはようございます。本日は、足元の悪い中お越しいただき、誠にありがとうございます。心より御礼申し上げます。

創価教育研究センター長の神立でございます。どうぞよろしく申し上げます。私は夏季大学講座をずっとここ15年ぐらい担当しておりますが、今回ほど緊張して望んだことはありませんでした。それはとりもなおさず、講義のテーマに原因があります。大変な題名をつけてしまいました。皆さんのご期待に沿えるようなお話ができるのかどうなのか、ということで、この1週間、悶々と致しておりました。

今日のテーマは、「創価大学における池田研究の現状と課題」ですが、もうこのテーマを見ただけで批判が出ておまして（笑）。「なぜ、お前が池田研究をするのか」とか、あるいは、あるご婦人からは「池田先生に課題はあるのか。課題はないだろう。なぜ、お前は課題を突きつけるのか」と（爆笑）。

まず、言い訳から入ります（笑）。創価教育研究センターは、2000年11月16日に開設されました。この日は、ちょうど50年前の1950（昭和25）年に、戸田先生と池田先生が日大の学生食堂で「大学をつくらう」と、初めて「大学の創立」のことを語った記念日なんですね。根拠はどこにあるのかというと、『若き日の日記』に示されております。

一番初めに、私たちとしては池田研究をやりたかったんですね。ところが、池田研究に至るまでの創価大学の歴史を考えると、これは牧口先生、戸田先生の話抜きにはできない。そこで、牧口先生の研究から少しずつ歩みを始めたわけなんですね。それで、去年、一昨年と2回にわたって、夏季大学講座におきましてご報告をさせていただきました。ところが、去年の夏季大学講座が終わってからは、いろいろ変化がございました。

まず、一番大きな変化というのは、10月29日に創立者の池田先生が私たちのセンターを初めて訪問してくださいました。私たちが集めて参りました資料類などを全部見ていただきました。整理が行き届いておらず雑然とした箇所など、見ていただきたくないところまで見られたという点もございますが（笑）。その時に、「私たちとしては池田研究が主たる目的なんです。そろそろ始めさせていただいてもよろしいでしょうか」とお伺いいたしました。皆さんご存知のように、中国の色々な大学では、池田先生の研究が始まっています。「海外ではそういう研究が始まっているのに、日本ではどうなのか。特に、創価大学で創立者の研究をしていないのはどういうことか」ということを考え合わせますと、始めなければ駄目だと思っていたからです。しかし、実はこの研究を始めるのは怖いんですね。並みのエネルギーではできない。お一人お一人に取材とかお話を聞きに行きますと、池田先生とのたくさんの思い出があるんですよ。その人的つながりというのは、計り知れないわけです。その中には、「自分は池田先生のことが分かってるんだ」とおっしゃる方もいるわけで、それはその通りだと思うんです。「その中で

何をしようか。どういうふうに進めていったらいいのだろう」ということにぶつかりました。

「何をやっても研究になるだろうけれども、何からやろうか。このままやらずに済ますこともできるけれど、やらずに済ますとどうなってしまうのだろう」という状況でした。こうした中で、先生から「やっていいよ。どんどん進めたらどうだ」とポンと肩を押していただいたような状況になりました。しかし実態としては、研究をどう進めるのか、という目論見が全くなかったわけです。その後、センターの教員、あるいは、職員の方々と共にまず手始めに自分たちのできるころからやろう、ということで始めました。

1つは本日も、池田記念講堂の1階で、創立者の翻訳書籍の「1300冊展」というのを行ってあります。何らかの形で科学的な裏づけ、つまり、実証が伴わないと研究になりません。感覚的に創立者はすごいんだというのは簡単なわけですが、「どうすごいのか」という話になると説明が難しいわけです。「すごい」「立派だ」「偉大だ」に対して、「なにが」と言われた時に、創立者は偉大なんですけれども、「どう偉大なんだ」ということがやはり科学的に裏付けされなければならぬだろう。それは学問的な、研究的な部分からそうなってます。

そこで、まず単純なことです。この研究において「創立者のことをどう呼ぼうか」「池田先生のことをどう言えばいいのか」ということで悩みました。牧口先生はもう亡くなられて半世紀以上経っていますので、研究対象になっているんですね。研究対象になると、「先生」はつかないんです。「先生」というと、自分にとっての「先生」ですから、個人的な所有物になる。

「先生」と呼べる人だけが研究していいというような、矮小化された形になりかねない。従って、牧口先生のことを研究している、ありとあらゆる人たちは、『牧口』という形で、論文を書くにせよ、話をするにせよ、そのようにやろうね。そうしないとみんなのものにならないよね。共有化できないじゃない」という話から始まりました。戸田先生のことと同様に「戸田」と呼ぶことにしました。

私の母親に聞きますと、「私は3歳の時に戸田先生から頭をなでられた」と（大爆笑）。それが私の母親にいわせると生きがいのようになってきた。頑張る要因だったと言っております（大爆笑）。戸田先生のごことは、当然ながら尊敬し、偉大な先生だと思っておりますが、呼称自体は「戸田」という形で研究対象としてまいりました。

問題はやはり池田先生です。「池田」と呼ぶと、「お前、何様だ！」と批判があったり（大爆笑）。そこで、みんなと議論したんです。「『池田』と呼ぶのはちょっときついで」と。でも、このタイトルには「池田研究」とつけてしまっているんですが、「研究」とついていることで救われているわけです（笑）。「池田先生」と呼ぶのか、それとも「創立者」という呼び方でいくのか。「創立者」と呼ぶと、創価大学生以外に創立者のことを「自分たちの創立者だ」と呼べないわけでしょう。創価大学と創価学園の出身者、あるいは、生徒さんたちだけですよね。これは少し矮小化されている。世界の池田博士がそんなことでは困ると。非常に悩みました。結論は出ておりません。いまのところは各個人に任せよう、という話になっております。本来的に池田先生の研究がもう少し深まっていくと、おそらく、「池田」という形になっていくと思います。しかし、研究対象としては正直、非常に難しいんです。何に手をつけても、池田先生が「私はそう思っていないよ」と言われたら、それでおしまいですから（笑）。

いずれにしても研究していこうということで、もう一つ始めたことがあります。私たちの創価教育研究センターで出している「紀要」というものがあります。「紀要」というのは、それぞれの研究機関に所属した研究者たちが、自分の研究成果を発表する場であり、その紀要『創価教育研究』が今年で第3号なんです。これは今年の3月に出版しました。そこで、私が巻頭言で

「池田研究への新たな地平」というのを書きました。今日もその1つの話題になると思うんですが、やろうとしたことは、とにかく、池田先生の活動にはありとあらゆることがあります。例えば、「平和」「文化」「教育」「人権」「芸術」などです。これだけ広範囲に及んでいますと、どこから手をつければいいのかということになります。そこでまずは研究として「池田先生とはどういう存在なのか」ということを大枠的につかみたい。池田先生は、少年時代を戦時中に過ごし、その中で悶々と悩みながら、いろんなことをやりながら青年時代を送り、現在の思い、思想に至っているわけです。現在のお考えや行動が、生まれたときからずっと続いていると言うことではない。当然、その過程では牧口先生からの伝統や、その多くは戸田先生から受け継がれたものであることは想像がつくわけです。こういう言い方をするのは大変失礼なんですけれども、全く違った姿というか人間に、がらっと変わった時があるんじゃないか。これはおそらく、牧口先生、戸田先生も同じだと思うんです。そうじゃないと、なかなか説明がつかないんです。そこで私自身、原点に戻って考えてみようと思い、池田先生の書物をいくつか読み直してみたんですが、やはり、一番合致するのは小説『人間革命』の「はじめに」の一節です。「一人の人間における偉大な人間革命は、やがて一国の宿命の転換をも成し遂げ、さらに全人類の宿命の転換をも可能にする」と。つまり、池田先生ご自身が『どのように人間革命をされてきたのか』という足跡を追いかけよう。それにまつわる資料をきちっと集めて、さらに我々がやった研究の上に、いろんな方々に研究をしていただく。そういうことをきちんとしておこう」と。こういうような発想で池田研究が始まりました。

従って、今日は少なくとも結論はできません。当たり前ですけども。結論が出て、「こうだ！」とは言えませんので。逆に言えば、結論が出てしまっている。「池田先生は偉大な人だ」と。けれども、そのところを少しずつ丹念に追いかけてみる。それは、私だけではなく、ここにいる皆さん方の仕事になっていくと思います。創価大学に関係する者としては、これをやらざるを得ないだろう。

私自身、まもなく50歳になるんですね。定年まで、あと20年しかない。この20年間で、どこまで研究ができるのか。20年程度で何ができるのか。それを踏まえつつ、今日は中間報告を発表させていただきたく思っております。

2. 大学における創業者研究

(1) 諸大学における創業者研究の具体的現状

まず始めに「大学における創業者研究」とは一体どういうものなのかについてお話をしたいと思います。

大学といいましても、「国立大学」には創業者がいませんね。これは「国のための大学」ですから、特別な創業者がいません。ですから、ある種、思想性というのはあつてないに等しい。あるとすれば、「国家をどう守るのか」「国家のシステムをどう維持、継続させていくのか。そのための官僚をつくる」ということ。それが、国立大学での主たる目的となります。従って、東京大学は国立大学の最高峰ですけども、ここの大学は、私たちから見ると「国家官僚の養成機関」である。東京大学で最も優秀な方は、例えば、今の財務省に入るとか、あるいは、外務省に入るとか、ランクが決まっているようです。そういう形で官僚が輩出されております。それはそれで必要なかもしれません。

ただし、いつも創業者をはじめ、皆さんがおっしゃっていますが、「私立大学」というのは、あくまで特色があるわけでありまして。その思想性といいますか、その特色はどこにあるのかと

いうと、明らかにその大学の「建学の理念」・「創立者の思想」であり、大学を創った「目的」ですね。これがはっきりと示されていること、それが一番の特徴になります。そこで、いくつか代表的な私立大学、特に創立者が明確になっている大学について考えてみましょう。

1つ目に、「慶應義塾大学」です。この大学の創立者は、皆さんご存じの通り福澤諭吉であります。慶應大学出身者の方は、「福澤先生」と呼んでおられます。「慶應義塾福澤研究センター」というのが、1983年の段階ですでに開設されているんですね。慶應大学は非常に大きな大学で、キャンパスがいくつかに別れております。港区の三田にキャンパスがあったり、日吉や、最近ではちょっと大学の業界では有名になっている藤沢キャンパス。その中で、慶應義塾大学を象徴するのはどこかということ、やはり三田のキャンパスになろうかと思えます。そこには古い旧図書館、東門のところにありますが、なかなか良い図書館です。ここで、「慶應義塾の中で何万、何十万という若人が勉強していたんだな」と感じさせるところであります。その図書館の中に、「慶應義塾福澤研究センター」（旧研究所）が開設されました。もともと「慶應義塾福澤研究センター」になる前に、1951（昭和26）年の段階で、すでに慶應義塾は創立100年ですので、『100年史』というのを作っています。大学の100年の歴史をまとめたものです。その『100年史』を編集したのが「塾史編纂所」。そこに塾史の資料室があって、その資料室で集められた資料をまとめた形でこのセンターが作られたということです。この慶應義塾福澤研究センターは、ありとあらゆる学部、それから高校・中学校・小学校・幼稚園がありますけれども、そういう学校の壁をこえた全塾的な共同研究機関。こういう意味づけをしております。これは私たちにとって、創価教育研究センターを開設する際に、非常に参考になりました。ただ、私たちの場合は、キャンパスも離れておまして、高校・中学校は関西にもありますし、これをどう一緒にするのが難しいんですね。そこでとりあえず、私たちは創価教育研究センターという形で出発をしました。創価学園では「創価教育研究所」というのをつくっています。こちらは、創価教育の実践方法を研究しているようです。

この慶應義塾福澤研究センターに匹敵するものが、早稲田大学です。早稲田大学の創立者は大隈重信で、彼のことを「大学史資料センター」というところでまとめております。私も見に行きましたが、大隈が暗殺された時に着ていたマントとかが残っているんですね。資料センターとしては非常に充実しております。写真資料から始まって、早稲田大学を卒業した卒業者の名簿が全部残っていました。それから、早稲田大学で教鞭を取ったことのある教員のリストや、大隈関係につきましては、とにかく写真が残っていました。写真というのは「いつ・どこで・だれが・どういう形で撮ったのか」ということになるはずで、写っている人の名前も分からない。それを早稲田大学の大学史資料センターでは追いかけていると言っておりました。膨大な資料が残っております。早稲田大学のおもしろいところは、調査研究の成果を実際に授業の中で学生たちに聞かせているんですね。つまり、「早稲田大学というのは、こういう目的でつくられて、こういう歴史を経て、今こういうふうになっているんだ」と。早稲田大学の歴史を、1年生の時から教えているそうです。私は意外だったのですが、この授業は好評だそうです。学生たちは「自分の学んでいる大学がどういうものなのか」ということを知ることが非常に新鮮なようで、自分の同一性、アイデンティティというものでしょうか、これを確認するのに一番いいみたいです。また、政治家が結構多いようなので、講演会をやったりするという話を聞いております。

それから、関西にある同志社大学です。創立者は新島襄です。新島の遺品庫資料というものがあまして、ここにも大学史のセンターがあります。同志社大学には「同志社社史資料セン

ター」があるんですね。このような名前をつけて、新島に関する資料を集めているそうです。ただ、今はまだ公開にいたっておらず、整理を進めている段階だそうです。

それから、立教大学ですけれども、同志社大学、立教大学となりますと、完全にキリスト教の思想が根底にあります。特に、立教大学というのは牧師がたてた大学なんです。アメリカ聖公会の宣教師、チャニング・ムーア・ウィリアムズ主教が日本に渡ってきて、立教大学をたてたということなんです。立教大学は正式には「立教学院」というんですね。「学院史」というのを今、作っているようです。『立教学院設立沿革誌』『立教学院85年史』『立教学院100年史』、そして最終的に、『立教学院125年史』というのを作っているんですね。その過程で集められた資料を「立教学院史資料センター」に入れているということです。

明治大学ですけれども、3人の方々が創立者だとされております。岸本辰雄・宮城浩蔵・矢代操の3人です。明治大学の前身は「明治法律学校」です。3人は司法省の法学校に在学していて、お互いに非常に仲が良かった。それで3人が話し合って「法律を学ぶ学校をつくろう」ということで、明治大学は始まったということです。明治大学は2001年の段階で創立120周年を迎えています。その120周年に合わせて、いろんな資料の収集をしているそうです。

法政大学の創立者は金丸鉄・伊藤修の2人です。法政大学も法律の学校から始まっております。法政大学の前身は「東京法学社」だそうです。1880年4月に設立されています。この大学も120周年を超えております。

このように、私立大学は創立者をいただきながら、それぞれの目的に向かって学校運営がなされているわけですね。これを考えていきますと、創価大学もおちおちしてられない。創価大学は1971年開学です。やっと30年ちょっと。もう少しで35年ということで、創大門や新体育館の建設ということで夢は広がっております。しかしながら、歴史を残すという作業は地味でもありまして、特に資料を集めるということがなかなか進んでおりません。ちょっと焦っております。私の友人たちを含め、創価大学の関係者というのは、いつも前向きなんです。過去を振り返るようなことをあまりしないんですね(笑)。いつも忙しい。ゆっくり過去のことを繙くことがないわけで。私たちだけ後を振り向いているわけですね(笑)。丹念に資料を集めておかないと、とんでもないことになるなと思っております。徐々に私たちも、まず大学史という観点で資料が必要ですので集め始めました。創立1971年の頃からの学生がつくった冊子とかピラとかなどを極力集めようとしています。でも、ピラなんかは残っていないんですね。ごくわずかなものを何とかかき集めて。大学の中に残っているゴミみたいなものを集めるのが私たちの仕事になっているようなものです(笑)。そこで、創価大学創立50周年の2021年までには何とか『50年史』というものは出せないかなと。その時に照準を合わせて、創立者の研究もやっていくべきだろうと。このような計画を立てつつあります。しかし、具体的には進んでいません。

日本における創立者研究について申し上げましたが、当然、世界各国にも大学があるわけですね。教育学部に坂本辰朗教授がいらっしゃいまして、坂本先生はアメリカが専門であります。今、坂本先生にお願い致しまして、「アメリカ合衆国における大学の創立者研究の動向」のようなものを追いかけてもらっています。意外だったんですけれども、アメリカにおける大学の創立者研究の数自体は多くないんですね。アメリカの歴史に関する基本的な考え方やいいますか、研究の基本スタイルというのが「グレート・マン・セオリー」、「偉大な人間の理論」つまり、「偉大な人がいるんだ!」というところに置かないようにしているようです。そういう歴史の綴り方がどうも受け入れられないそうです。だから、創立者を特別扱いするということをやらないようなんですね。それが特徴です。

ただ、全くないということではない。特定のタイプの大学の中には、創立者研究を行っているところがあります。それはどういう大学かという、大枠にしますと3つあります。1つ目はカトリック系の大学。いわゆる、宗教を基盤とし、宗教を前面に押し出している大学です。2つ目は女性の大学、女子大学。3つ目はアフリカ系アメリカ人の大学。それらの大学に創立者研究が集中しているというのが、現段階でのアメリカにおける創立者研究だそうです。いろいろと問題点がありますが、私たちは坂本先生を中心に「世界各地の大学における創立者研究がどういう状況なのか」ということを知っていこうと思っております。これも今、始まったばかりです。模索の状態です。

(2) 創立者研究の意味

さて、次に「創立者研究の意味」ということになります。大学に身を置く者として、これは非常に難しい。私立大学の特色は先にもふれましたように、基本的に「建学の精神・理念」にあるわけです。「いかに建学の精神と理念を実現化していくのか」ということが主たる目的となります。先程少し紹介した早稲田大学での一例ですが、「自らが所属する大学との一体感→大学史の重要性」のために、「共通基礎科目として、新入生が自らの大学の歴史を学ぶ講座が開設」されています。「共通基礎科目」というのは、旧システムの「教養課程」「教養科目」というのでしょうか、誰もが取らなければならない科目。これが今、大学では「共通基礎科目」という名前になっています。その中の1つに、「大学の歴史」を語る講座があって、そこで「建学の精神・理念」を大学に所属している学生たちにきちんと理解させる、ということをやっています。

これについては、私たちも一生懸命考えてきました。今、創価大学でやっていることは、「共通基礎科目」の中で、例えば、「人間教育論」という講座を設けまして、学長をはじめ、大学の首脳がそこで講義をする。その講義の中で、創立者が示された「建学の精神・理念」を考えようという講座があります。その講座は、創価大学でもかなり多くの学生が受講しております。

それからもう1つに、「共通基礎科目」の中にゼミというものを設けております。このゼミというのは、少人数で教員を中心にしながら、いろいろな議論をする授業形態です。その授業では、創立者のさまざまな対談集を教材にしながら勉強し合うということをやってきています。

創立者が創価大学の諸行事において講演されたものをまとめた『創立者の語らい』という本があります。この中でも伝統的に学習されてきた講演が3つあります。

1つ目は、創立者が初めて創価大学で学生にされた講演であります。1973年4月の第3回入学式で、「創造的人間たれ」という題名の講演をされました。2つ目は、その年の夏に滝山祭で記念講演をされています。これが「スコラ哲学と現代文明」というものです。そして3つ目が、第4回入学式での講演「創造的生命的開花を」であります。今の学生たちは、これら3つの講演をまとめて、いつの頃からか「草創三部作」と呼び、それを伝統的に勉強しているんです。この草創三部作を教材にしてゼミをやっている先生がいます。その中で、「建学の精神とは何か。創立者の理念とは何か」をそれぞれ勉強しあっています。草創三部作というのは、「池田先生が何のために大学をつくったのか」、あるいは、「池田先生の考えている大学像・大学論」などが余すところなく語られていると、私たちは感じております。そこで、「なぜ、私が大学をつくらなければならなかったのか。そして私とともに君たちよ。若き創立者として、この大学をつかっていってくれたまえ」という論調なんです。それについて去年、実は創価教育研究センターでも研究をしまして、「草創三部作を読む」という連続講演会をやりました。その講演も「紀要」に載せました。それが、学生が学ぶために参考になるということで、その部分だけを抜き、

小冊子にしました。草創三部作の勉強は今後も続けていかなければならないなと思っておりません。

草創三部作の内容は、池田先生の若き日の考えと合致すると思います。なるほど、若い頃から考え方が変わっていないなど。基本的なものが若い段階でできているんじゃないかな、という感じます。つまり、池田先生がおっしゃっていることは一貫しているんですね。それがよく分かってきます。だから、池田先生のような講演も一貫していると思います。切り口とか角度が違うだけで、根底的なところは一緒ではないかなということが分かり始めました。それ以降、第5回入学式、第6回入学式でも、池田先生は講演をされているんですね。夏季大学講座でも一度、講演をされています。

このように、池田先生はさまざまな講演をされているにも関わらず、学生は草創三部作を勉強しているんですね。その中に散りばめられている池田先生の思いといいますか、理念といいますか、そこに建学の精神が如実に現れていると、学生諸君が感じているんだろうと推測しています。

ただし、問題は、「創立者」というと創価大学をつくったという意味だけになってしまうので、「池田研究」という視点からしますと、すでにお話し申し上げたように、やや矮小化してしまいます。それだけではなく、もっと広く哲学者、宗教家、文学者、教育者として語られるべきだろう。そうすると、創立者という枠組みの中では捉えられず、これは丹念に資料を追いかけていけなくていいんですね。これは大変なんです。どこにどういう資料があるのか分からないんです。誰も全容を把握していないし、把握できない。そのぐらいすごい量なんです。聖教新聞社の資料室の先輩方にもお聞きしたのですが、資料はあるにはある。けれども、これで全てだとは言えない。そういうことになると、どこにどういう資料があるのか。おそらく、全日本に散らばっていると思うんです。例えば、池田先生が書かれた揮毫があります。これは何点ぐらいあるんでしょうか。全然分からない。想像が付きません。今、大学の中にある池田先生の揮毫を集めています。それだけでもまだ集りきっていません。このような状態にも関わらず、全国を探し回るといことは、創価教育研究センターのスタッフだけではできません。今日、ここにいらっしゃる皆さん方で一致団結してやるしかない（笑）。

とにかく、やらないといけなくてたくさんあるんです。そこでまずは、足元から手をつけようということで始められたのが、「池田先生の生涯」です。それを丹念に追いかけています。ただし、これは研究ですので、感情的に言ってもだめですね。「誰が読んでも納得がいく」「誰がその跡を追いかけても同じ結論が出る」「池田先生をよく思う人や悪く思う人もいる。批判や称讃もある。しかし、どちらの側から追いかけてもその資料を見ると、そう言わざるを得ない。こういう資料をきっちと揃えたい」というのが、私たちの基本的なスタンスです。

3. 池田研究の研究史的概観

(1) 池田研究の傾向性

では、3番目に入ります。それは日本の中で、これまで池田先生について、どのような研究がなされてきたのか、ということを見てみようということです。それで、まず始めに挙げたのが、宗教学者の島田裕巳著『創価学会』であります。今年、新潮新書から出た本です。皆さんはお好きではないでしょうが（笑）。しかし、研究としては読まないといけなくて、私も読みました。中立的に書かれたものといえると思います。ただ間違いが若干あります。島田さんが

使っている引用文献があるんですね。それは創価学会が出しているものなんですが、引用されている内容それ自体が間違っているんですね。つまり、創価学会が出している本の内容で間違っているところがあるということなんです。研究が進んでくると、そうした点も是正されていくということの証左です。

私は去年、一昨年と牧口研究のことでご報告させていただいたんですが、やはり少し間違っているところがある。例えば、牧口先生はもともと、「渡辺家」で生まれその後養子に行く。養子に行った先は、自分の「お父さんの妹、つまり、おばさん」のところなんです。今までの『評伝・牧口常三郎』を読みますと、「お父さんのお姉さん」となっているんです。そのような違いです。大きな問題ではないですよ。ほんの些細な問題です。その程度なら別に良いじゃないか、という人もおります。しかし、研究者というのは1つ間違っていると何も信用しないという人種でありまして。「間違ったことが書いてあると、別のところも間違っているんじゃないか」と疑い深いんですよ。成仏しませんよね（大爆笑）。

島田さんは、これまでの創価学会の研究を概観して「創価学会のスキャンダルを暴こうとするもので、客観的な立場から創価学会についての情報を提供するものにはなっていない」と書かれている。つまり、今までの創価学会研究というのは、週刊誌のように事件的なことを暴くものが多く、客観的な立場ではない。どちらかと言えば、悪く書いて足を引っ張ってやろうというもの。そして、「中立的な立場から書かれた書物は手近に存在しない」。つまり、宗教学者である島田さんが、日本で最大の宗教団体である創価学会を研究しようとする時に、過去の創価学会研究を見ると、「学問的に研究するような中身になっていないじゃないか」と。このようなことを言っているんです。「だから、自分としては中立的な、客観的な立場で創価学会のことを語りたい」ということで書かれた本です。むろん、批判的なことも書いてあります。簡単に言うと、「資料が出てこないのは創価学会が1つの集団となり、外に出さないようにしているんじゃないか。このように疑われて仕方がない」。全然そういうことはないんですが。ただし、彼の認識ではやはり、「今まで研究されてきたことがない」というふうを受け取れます。評価はそれぞれですよ。「創価学会が日本の歴史の中で、どういう位置づけがされるのか」という観点からも書いているんです。その評価の仕方や考え方は、学者ですから、物の見方ですから、私はどのように見てもいいと思っているんです。それをこっちで批判すればいいわけですから。

いつも私はお話ししているんですが、創価学会というのは非常におもしろいんですよ。日本の歴史の中でありえない集団ですね。皆が喜んで、自らが手弁当でやっている集団はない。喜んでやっているように見えて、その反面、不満とか疑問とかたくさんあったり（大爆笑）。それでも頑張れるというのがすごい集団だなと。日本全国、どこへ行っても同じですから。そして、ご婦人が元気である（笑）。それはおそらく、今後少なからず、いろいろな学者の研究対象になります。宗教学者、社会学者、文化人類学者とか。私たちが標本になっちゃいます（大爆笑）。

（2）日本における研究史

それで、島田さんは創価学会の研究はこれまで「客観的な、中立的な立場で書かれていない」と言っていますが、これは池田研究にも言えることです。今まで、その研究がきちっとされていない。どちらかというと、想像の中で書いているものが多いんですね。そこで、「池田大作研究関係書籍目録」を作ってみました（表1参照）。このリストは、私たちの研究に比較的、耐え得る研究を並べたものです。早い時期では、1965年に高瀬広居著『人間革命をめざす 池田大作 その思想と生き方』という本が出されているんです。1965年というのは、池田先生が会長

に就任してからわずか5年ですね。その段階で注目されていることが分かります。それから、室伏高信著『どんな日本をつくろうとするのか 池田大作』があります。また、五島勉著『現代の英雄 日本が狭すぎる5人の男』という本はかなり読まれました。ちなみに他の4人は、三島由紀夫、小澤征爾、本田宗一郎、黒澤明です。それから、菊村到著『小説 池田大作』があります。かなりフィクションが入っています。まだ他にもあります。

そのリストの真ん中に、ご本人が書かれた池田大作著『私の履歴書』がありますね。日本経済新聞社から1975年に出版されています。この本はご自身で書かれていますので、1つの貴重な資料となります。

それから、吉村元佑著『池田大作 平和への旅』が第7巻まで出ています。これは吉村さんが、池田先生にずっと随行し、それぞれのところでどういう方々との出会いがあったのかを丹念に描いております。その他、最近、話題になった研究が、木村恵子著『人間池田大作 私の見た素顔』です。木村さんは、アメリカで放映された「人間池田大作」という番組のプロデューサーです。創価学会員でもなくSGIメンバーでもない。その方が初めて池田先生と接触して、「どういう印象だったのか」ということが書かれています。テレビ番組ですから、マイクを持つ人や線を持って走る人、クルーの方々がいます。そして、池田先生はクルーの方々に気を配られて、終わった時に「ありがとう」と頭を下げられました。中には体格のいい方がいて、池田先生が「何キロですか」と聞いたり(笑)。皆がそれを見て喜んでいたというエピソードが書いてあります。番組もよくできてまして、「人間池田大作2」というのもできたんですね。これはちょうどテロが起きた2001年9月11日の前に撮り終わりました。そして、その年の秋か、その翌年の春あたりに、カリフォルニアのケーブルテレビで、日本専門のチャンネルがあるんですね。そこで流されました。内容は、「アメリカ創価大学がどのようにできたのか」という話です。羽吹学長が池田先生を語るというものになっております。

最近の本では、中澤孝之著『ゴルパチョフと池田大作』ですね。中澤さんもいろんなところで講演をされています。

以上、このリストに挙げられた研究が、資料としても使えるし、また研究としても残せるのではないかと思います。

(3) 海外における研究史

では、海外ではどうなのか。これは、徐々に始まっているとしか言いようがありません。後で紹介しますが、中国関係の池田研究は確実に進んでおります。中国以外でどのくらいあるのかというと、まとまったものは公表されておられません。ただし、翻訳書籍は日本人としてはトップクラスです。つまり、自分の書かれたものが外国語に翻訳されて、その土地で出版されている。本年3月19日の卒業式の時に、私たちのセンターで「翻訳書籍展」を開催しました。その時は1000冊だった。こういうことをやるとおもしろいんですね。情報を発信するところに情報は集ります。3月の卒業式の時点でやっと1000冊になったのが、実は昨日(8月28日)の段階で、合計1351冊になったんです。つい最近、手に入ったのは、シリアで出版されたアラビア語のものでした。正式な出版社から出されていないものです。この本が2冊手に入りました。どのように入手したかということ、その「翻訳書籍展」をご覧になったある方が、「自分が学生の時に留学した国に池田先生の本が出ていたので、買わないといけないと思い、買いました。だけど、1000冊展を見たら、その言語がなかったので寄贈します」ということで、持ってきて下さったんですね。

また、池田先生にも卒業式の終了後にご覧になっていただきました。「よくこれだけ集めたね」とおっしゃられていましたね。それから、英語版の『人間革命』は、三吉悌吉画伯の書いた挿絵が表紙になっているんですね。池田先生はその前に立ち止まって、「懐かしいね」とおっしゃっていました。

また、まとまった研究はどういう所で行われているかという、これはなかなかないんです。デンマークのある研究会では始まっています。実際に、『創価教育研究紀要 第3号』の中で、水元先生の書かれた「第4回入学式創立者講演『創造的生命の開花を』を読む」があるんですが、「これを翻訳させてくれ」という要請がきたりしています。少しずつ、私たちの仕事の世界の中で目にとまるようになっていきます。これは喜ばしいことなんですが、あまり要請があっても困るなど。私たちには日常の研究活動があって、なかなか対応ができません。センターに所属している研究員は皆、兼任なんですよ。私は経済学部で授業をやりながら研究している。私には「江戸時代の経済」についてのテーマもある。その論文を書かないといけない。それと共に、池田先生の研究もしたい。他の先生方もそうなんです。だから、「何とか専任になりませんか」とお願いしているんです。しかし、なかなか上手くいかないんですね。学長や理事長は「創価大学のために頑張ってくれ」と激励して下さるんですが(笑)。また、職員が2人しかいない。後、アルバイトのメンバーが非常に頑張ってくれています。大学院生の方々です。大学院生が私たちの後継者として育っていくことを期待しながら、私たちも必死になってやっております。これが現状です。池田研究はまだ始まったばかりです。

4. 創立者の人生について

(1) 幼少期から青年期

では、創立者の人生について少しずつお話ししていこうと思います。皆さん、ご存知のことと思いますが、一緒に振り返っていきたくと思います。池田研究の具体的なものの1つが、池田先生の人生を追いかけることなので、それを少しご紹介していきたいと思います。

まず、お生まれは1928(昭和3)年1月2日です。場所は、東京都荏原郡大森町字新井183番地。現在の大田区大森北2丁目にあたります。お父様は子之吉^{ねのきち}で41歳の時、お母様は^{いち}で33歳の時に生まれました。8人兄弟の5番目です。兄4人、弟2人、妹1人です。「大作」なんですけれども、「太く大きく丈夫に育ってもらいたい」という願いが込められて、初めは「太作」でした。後に改名されて、現在の「大作」となりました。戸田先生の名前も、「戸田甚吉」から「戸田城外」、最後に「戸田城聖」と。牧口先生も「渡辺長七」から「牧口長七」、そして「牧口常三郎」と。こうした「改名」は当時のものの考え方からすれば、ごく当たり前のことで、珍しいことではありません。

お生まれになったお宅の職業は、浅草海苔の元祖と呼ばれる海苔製造業です。冬は海苔作りで、春から秋にかけては畑作をしていた。お聞きすると、池田先生の好物の1つは海苔の佃煮のようです。非常に庶民的ですね。一時は、池田家は付近でも屈指の海苔業を営んでいたんですね。ところが、池田先生がお生まれになる前のことですが、関東大震災があります。この震災による被害によって、屈指の海苔業が徐々に傾いていった。その段階で、昭和3年に池田先生はお生まれになりました。ですから、お宅のお仕事が順調な時にお生まれになったわけではないというところに、1つの出発点があります。

お父様の子之吉は、「強情様」と呼ばれていた。池田先生の書かれた『私の履歴書』に次のようにあります。「頑固の裏に、馬鹿正直な生一本が貫かれていて、結局は人の良い父であった」

と(『私の履歴書』13頁)。だから、近所では頑固者で通っているけれども、結局は人が良くて騙され易い。典型的な江戸っ子のタイプですね。確かに、池田先生は江戸っ子なんですね。よく言いますけれども、「はひふへほ」がはつきりしない。「さしすせそ」になってしまう(笑)。だから、創価中学・創価高校の入学式の池田先生の話で、「白い空」と述べられた。実は、池田先生は「広い空」と仰っているんですね(笑)。しかし「白い空」と聞こえて、「何が白いんだろう?」と考え込んだ中学生がいるんです(大爆笑)。お母様の一は、「頑固一徹なお父様に懸命に仕えて、男7人女1人の8人の子を抱え、その上、親類の子2人を引き取っていた」と。「いつも達者で、まずしさなどには挫けなかった。強い女性であった」(『私の履歴書』20頁)というお母様なんですね。お母様については、池田先生も時々語られています。詩も書かれていますね。私が印象に残っているお話では、池田先生は非常に綺麗好きです。きちんと整理されていないと嫌なんですね。なぜ、そこまで綺麗好きなのかということが分からなかったんですが、「私が綺麗好きなのは、母親が綺麗好きだったからだ」とおっしゃられていました。お母様は非常に綺麗好きで、朝きちっと掃除をされて、そして食事をしていました。

1930(昭和5)年、2歳の時、生まれた大田区大森北2丁目から糞谷に引っ越しています。現在の大田区東糞谷5丁目に移転しました。

それから、1933(昭和8)年、5歳の時です。これは尋常小学校にそろそろ入学するという年齢になっていくんですが、入学の直前に、突然高熱を出して寝込んでしまうんですね。これは肺炎と診断されました。その時に、「母一は、庭の石榴を指して、『潮風と砂地には弱いというのに花を咲かせ、毎年実をつける。おまえも今は弱くとも、きっと丈夫になるんだよ』と励ました」と書かれていますね(『私の履歴書』25頁)。その母親の励ましが非常に心強く、頑張ろうとする意欲につながったということを述べておられます。

1934(昭和9)年、6歳の時です。羽田第二尋常小学校に入学します。これは現在も跡が残っておりまして、大田区立糞谷小学校というところですよ。担任は手島先生です。この時の自分の思い出として書かれているのは、「いたって平凡ではあったが、遊ぶ時には誰にも負けないほど腕白な少年時代を過ごした」と。活字にはなっていませんが、いろんな遊びがお好きで、「面子とかペーゴマをやった」とおっしゃられていました。

1935(昭和10)年、7歳の時です。担任が日置先生に変わります。この頃まで、池田先生は何不自由なく、少年時代を過ごしてきます。ただ、この頃から少し変化が生じてきます。まず、お父様がリュウマチで寝込むようになります。そして、この後5年間、仕事ができなくなる。やむなく池田家は、海苔の製造業を縮小します。規模縮小するのはいいんですが、裏を返せば収入が減るということです。これ以後、生活が苦しくなっていました。それで、池田先生も家業の海苔業を手伝い始める。7歳の時からなんですね。それで、一番上のお兄様、長男の喜一さんも中学校を辞めて、野菜の行商に出るようになります。つまり、少しでも家の収入を支えるために学校を辞めて働き出したということです。お母様はこのような困難な中でも明るく努めておられた、というのが池田先生の印象です。

もう1つ大きなポイントになるのが、1937(昭和12)年9歳の時に、長男が出征してしまいます。戦争に行くわけですね。お父様が倒れて働き手がない。なおかつ、お兄様が家計を支えていたにも関わらず、戦争で兵隊に取られてしまう。そういう状況でした。

それから、これは一番有名ですが、1938年、10歳の時、担任が檜山浩平先生に変わるんですね。5年生と6年生の時にお世話になったのが、檜山先生なんですね。糞谷3丁目の広い屋敷を人手に渡します。糞谷2丁目に移転しました。更に、お兄さんが出征されたんですが、2番

目のお兄さん、3番目のお兄さんの2人が続々と出征してしまいます。ご本人は5男で、上にお兄さんが4人いるんですが、4人のうち3人が戦争に行ってしまう。それで、生活はますます困窮した。少しでも家を助けようとする気持ちから、本格的に家業を手伝うようになりました。ただし、この頃から、微熱と咳に悩まされています。病気がちな日々が続きました。お父様とお母様は非常に心配され、いろいろな治療をされたそうです。しかし、なかなか良くならなかったということです。この時、10歳の少年池田大作は何を考えていたのか。『私の履歴書』に次のように書かれています。「青少年時代の私の脳裏から、人間の生死の問題がいつも去ることがなかったのは、やはり、一貫して健康に優れなかったことと関係しているようだ。寝汗をびっしょりかいて、うなされながら『人間は死んだらどうなるんだろう』等と、今思えばたわいないが、少年らしく青くささで考えたのは小学校のころであった」と(『私の履歴書』25頁)。健康という面が、人間の1つの考え方にどう影響を与えるのかということが読み取れます。この時のエピソードですが、池田先生が笑いながらお話されました。ある時、仮病を使って休んだようです。そして、皆でわいわい言いながらベーゴマで遊んでいた。そしたら、突然、檜山先生が家庭訪問に来ることになった(笑)。あわててお母さんに布団を引いてもらって、じっと寝ていた。檜山先生が来て、頭を触って、「もう治ったようだ」と言って帰られた(爆笑)。「あの時は本当に大変だった」と。しかし、「自分の家に先生が来てくれたというのが、自分たちの家の大きな歴史の一つになっているんだよ」と言われました。「教師がいろんなお宅を訪問するというのは、そのお宅にそれほどの歴史を作ることになるんだから、しっかりやりなさい」と。私ども教員に対する激励のために、わざわざご自分のエピソードを使って話されておりました。

11歳の時、小学校6年生の頃ですね。この頃から池田先生は新聞配達を始められたそうです。「辛い仕事だった。病弱な体をなんとか丈夫にしたいと思っていた」し、それから「出征中のお兄さんたちの分を少しでも補って、家計を助けたい」という思いで新聞配達を始めたようです。3年間続けた。アルバイト料は月6円だった。この頃の1日について次のように書いています。「午前2時に起床。海に出て、海苔貼りをした。午前4時から朝刊の配達。その後、学校へ行って、帰宅後に海苔を剥がして夕刊の配達。その夜は、海苔についたごみ取りをした」という生活を繰り返していたということです。その頃の夢は何であったかということ、「新聞記者か雑誌記者」であった。文学青年といましようか、そういう文学に対する造詣、興味がこの頃から芽生えているんですね。よく比較されますけれども、初代牧口先生は教育熱心であり、話すよりも書く方が得意だったそうです。ピラの裏に何でも書いていた。メモを貯めておいて、1つの本にまとめられた。戸田先生は牧口先生とは違って、事業が好きで、経済のことに非常に熱心であった。牧口先生が教育、戸田先生が経済、池田先生は文学と比較対照されます。その芽生えが11歳の時にあった。『私の履歴書』には、「私にはじっくり落ち着いて勉強できる環境はついぞなかった。その代わりに、本を読むよう努力した。人に負けないほど読んだと思っている。文筆を志したのも、読書が大きく預かっていよう」と書かれています。

創価大学には「池田文庫」というのがありまして、池田先生が若い頃から集められたものです。「これを学生さんたちに使うように」ということで、中央図書館の一番上のほうに保管されています。ありとあらゆる分野の本が入っています。それで、中には池田先生が勉強された書き込みがあるんですね。これは大切なものなので、横へ寄せて取ってあります。それはすさまじい書き込みです。池田先生は、赤鉛筆を持って読まれるんですね。そして、大事なところに赤でチェックしていくんですね。若い頃の読書量はすさまじいものがあったと思います。それ

が11歳の時から始まっているんです。

また、11歳の時、「伊勢、奈良、京都など、関西の方面に4泊5日の修学旅行」に行かれたんですね。1泊目に友達におごっちゃうんです。お小遣いを全て使い切ってしまう。それを見た担任の檜山先生が「両親にお土産を買いなさい、と2円のお小遣いを下さった」と。池田先生にとってこの思い出が忘れがたいものになるんですね。その後、檜山先生との交際がずっと続いています。

昭和15年、12歳の時。3月に羽田第二尋常学校を卒業します。4月に中学校へ進みたかったんですが、家の事情が許さない。羽田高等小学校、昭和16年には萩^{はぎなか}国民学校に変わるんですね。当時の戦争が庶民生活に段々押し寄せてくる時期ですから。高等小学校が国民学校へと変わるんですね。その羽田高等小学校へ進学します。

昭和16年、13歳の時。7月に長男の喜一さんが一度除隊して、家に戻ります。それは非常に心強かったそうです。お兄さんは翌年の12月に、再び出征になります。先取りすると、それで帰らぬ人になっていくわけです。

14歳の時です。萩^{はぎなか}国民学校を卒業されました。卒業してすぐ4月に、3番目のお兄さん、開造さんが勤めていた新潟鉄工所に入社します。この新潟鉄工所を調べてみますと、当時の海軍の艦船部門の一翼を担う軍事工場だったそうです。そういう軍事工場になったものですから、その会社の中に青年学校が設けられるわけです。1日のうちの半日は、青年学校で各教科の勉強をし、残りは工場実習ということで軍需製品の生産に携わるという生活ですね。実際には実習の中で鋼だとかハンマー、旋盤やフライス盤を使って鉄を切ったりする作業をしていました。その思い出が『私の履歴書』に書いてあります。「モーターの音が工場内に響く。熱をもって、赤く燃えた鉄粉が飛び散り、火傷の危険が付きまとう。油にまみれ、汗を流し、神経を鋭く張り詰めながら私は精一杯働き続けた。今想うとき、当時身に付けた機械工作の基礎的技術がどういうわけか現在でも、人生を語る時に何かと役立って感謝している」（『私の履歴書』43頁）と。辛い仕事に対しても感謝の念を持ち、無駄にしないという生き様がここに現われていると思います。毎朝、定刻の1時間前には出社しており、社内の掃除をしています。ただし、この頃から悪性の肋膜炎が進行し、無理をしながら出勤を続けていた。

昭和19年、16歳になりますと、4番目のお兄さん、清信さんが出征します。つまり、昭和19年の段階で、池田先生の上のお兄さんが全員、兵隊に行ってしまった。残されたのは自分だけである。以来、一家の面倒を1人で見るようになる。ですから、昭和19年以降、お兄さんが帰ってくるまでは池田先生が一家を支えていくという状況になっていくわけです。青年学校の軍事訓練中に血痰を吐いたり、当時、結核が相当進行しており、経済的に医師にかかる余裕もない。何をしていたのかというと、『健康相談』という雑誌があったそうです。その雑誌を頼りに治療に努めていたそうです。しかし、高熱を出しながら過酷な労働をしていたので、病状はますます悪化していった。止むを得ず、工場長にお願いをし、事務系の仕事に移させてもらった。そうでないと仕事ができないぐらいに体がきつかったようですね。その中で、学徒動員で新潟鉄工所に来ていた中学生5、6人がいて、このメンバーで読書グループを作った。週2、3回集ったそうです。この時に、白木文郎さんと親交を深めた。この白木さんが奥様のお兄さんで、この出会いが16歳の時にあるんですね。文学についていろいろ話し合っていたそうです。

昭和20年になりますと、17歳。3月、東京方面への空襲が日を追って激しくなり、梶谷2丁目の家が強制疎開になりました。馬込4丁目のおばさんのお宅に1棟建て増しをしてもらって、リヤカーで引越しを始める。3月に引越しを始めて、5月24日ようやく引越しを終えたんで

すが、その日に空襲で焼け出されてしまう。結果、急ごしらえのバラック小屋に住むようになった。茨城県の鹿島にある結核療養所に入る予定で、一時軍事工場を休んで、自宅で静養しているんですが、入院の順番を待たなくてはならない。その時に空襲にあったので、何もかもなくなってしまい、療養所に入るのを断念した。その頃、医者から何とされていたかというところ、「26歳までは持たないだろう」と。池田先生はよく「ここまで寿命を延ばしてもらったんだ」と言われますが、これは17歳の時に「余命10年」と医者から通告されているんです。もちろん、身の回りは戦争で何もありませんし、そういうなかで自分の命の先が読めてくるわけですよ。ね。「余命10年」というと、やはり若い時には深刻ですよ。その時の印象を次のように述べています。「戦争の無残さは津波のように我が家を襲い、全てをめちゃくちゃにした。私はいつとはなしに、戦争の無意味さを問いつづけるようになっていた。何のための戦争か。戦争の悲惨さはこの五体に刻み込まれ、その体が戦争の告発へと向かっていった」。この戦争体験は、この当時、17歳、18歳の方々の印象と、ほとんど一緒です。ですから、戦後まもなく、いろんな人が色々なことを考え、ある人はキリスト教に走り、ある人は共産主義に走るという状況になっていきます。これは無理もない話だと思います。特に、『きけわだつみの声』という学徒出陣をしていた人たちの文章を読みますと、かなり深刻ですね。例えば、精神論で「神国日本である」「精神さえ強ければ勝つんだ」と叫んでいる軍事教練の教員たちが、一体何をしていたのか。自分は楽をして、気に食わないことがあれば学徒出陣で出てきた若者を殴ったり蹴ったりと。「こんなことで日本が勝てるわけがない」と書いている人もいます。ですから、「正義」を語っている人が何をしていたのか。当時、そういう矛盾が段々と膨れ上がっていき、その人の気持ちにならないと、この時の状況を読み取れないんです。ですから、私たちは池田先生ご自身の書かれたものだけでなく、できる限りその当時の資料を集めながら、その時代の状況を積み上げていこうかなと思っています。これについてはいろんな研究があって、今後の課題になっていくと思います。

ご存知のように、8月15日は終戦を迎え、激動する世情の中で、「真実とは何か」「人間とは何か」、そして、人生の真理を求めて悩む日々が続いた。無性に勉強がしなくなり、夜間の中学校に行こうと考える。「とにかく、学校へ行こう。それも、昼間の学校へ行くことなどは経済的にとても余裕がない。私には残った男の子として、家の生計をささやかではあるが支えていくことが不可欠であった。また、私は働きながら学ぶ学生の心も知りたい気持ちもあった」。終戦と共に、勤めていた新潟鉄工所が閉鎖します。そして、現在の大田区下丸子にあった、東洋内撚機という会社に一時席を置きました。この時の様子が『忘れえぬ出会い』の中で出てくるんです。9月は敗戦による食料不足のために、池田先生は千葉県幕張まで買出しに行くんですね。その時に出会った買出し先の主婦が、池田先生の家庭事情や体の具合に温かい理解を示してくれた。それが心の中に残っていて、それを後年、『忘れえぬ出会い』で書いております。「栗のようにほくほくした農林芋のおいしかったこと。そして、弟、妹たちの嬉しそうな顔が忘れられない。芋の温かさには、あのお上^{かみ}さんの真心がしみているように思えた。買出し人が殺到する農村にあって、強欲さをいささかも感じさせない、優しいお母さんのようなお百姓さんであった」（『忘れえぬ出会い』51頁）と。これは買出しに行かれた方しか分からないことだと思います。当時の農村のお百姓さんたちには、都会の人たちに「目に物見せてやる」という発想が若干ありました。「今まで俺たちは馬鹿にされ続けてきたけれども、食糧がなかったらへこへこ頭上げてくるじゃないか」というような、非常に人間の醜い側面が出ていたそうです。この買出しで嫌な思いをした人がたくさんいるんですね。その中で、池田先生と出会いのあった方は、

2度目に行った時も温かくして下さいました。その恩が心に残るんですね。

こういうことから、池田先生は非常に感受性の豊かな、本当に人の気持ちをダイレクトに受け止められる心を持った青年だったんだということが分かります。

この年、友人の紹介で、神田三崎町にありました、東洋商業、現在の東洋高校というんですが、この夜学2年に中途編入します。「多忙な中、疲労が重なる日々ではありましたが、その東洋商業に通っていた時に、良き友、良き教師に出会う貴重な機会であった」と。特に、珠算と英語の教師にいろんな影響を受けるんですね。「その時代を展望して、全力で教育に打ち込む姿に深い感銘を覚えた」と。これも『忘れえぬ出会い』に書いてあります。「多くの青年と語り合うたびに、このお二人の先生方のことが蘇ってくる。あの貧しき学生たちを思ってくれた冷厳な叫びの先生と、情熱たぎる先生。このお二人を忘れることはできない」と書いています(『忘れえぬ出会い』212頁)。池田先生は入学式の話の中でほんの少々ふれられておられますが、「珠算が苦手だった。面倒くさい。いくらやっても合わないんだ」と(笑)。

昭和21年、18歳の時、1月10日、3番目のお兄さんの開造さんが復員をしましています。それから、新潟鉄工所時代の友人の紹介で、西新橋にある昭文堂という印刷会社に入社します。この時の所長さんが黒部武男さんです。「この方に随分お世話になった」ことを、後年書かれております。「朝6時30分に自宅を出て、夕方5時に退社。その後で、東洋商業に通う」という生活でした。「会社では営業の担当。自転車ですべてを回ります」。やがて、いろんな文章を作ったり、校正作業を手伝うようになった。この時の経験が、後々、戸田先生が作られた日本正学館の会社に入って、雑誌の編集の仕事に携わるわけですが、その時に大いに活かされたと言われています。

私は創価中学校1期生なんですけど、中学2年生の時、池田先生のご提案で、「創価高校、創価中学校の『校史』を作ろう」ということで、『建設の一年』という本をまとめることになりました。私は編集の一員にさせていただいたんですね。池田先生は月1回、私たちを呼んで下さりまして、食事を一緒にして下さいました。食事といってもラーメンと、デザートにタイヤキです(笑)。「このタイヤキは、尻尾まであんこが入っているんだよ」と(笑)。秋口になって、本の制作も終盤近くになりました。ゲラが刷り上がり校正作業をしている時に、池田先生がその作業部屋に入って来られたんですね。私たち中学2年生に言われたことは、「ここでやっている校正作業は、必ず将来に役に立つよ。絶対、君たちの力になるから」と。私自身、この言葉は記憶に残っております。今、私は研究者の立場になりまして、自分で書いた論文が本になり、校正をしないといけない時に、中学2年生の時に覚えた記号が全て頭に入っているんですね。「池田先生の言われたとおりだな」ということを実感しております。また、池田先生の書物を調べていくと同じようなことが書かれてありまして、「池田先生は経験されたことを話されていたんだな」と感動しました。

その頃、池田先生は結核なんですね。まだ完治していないんですよ。夕方になると、必ず熱が出た。随分、長く続くんですね。この時の黒部社長のことを『忘れえぬ出会い』で書かれています。「印刷所の独特の匂いの中に帰り、機械の単調な音の繰り返しを耳にすると、なぜか心が和んだ。休んだほうが良いのでは。黒部さんは寡黙な人であったが、従業員の動向には本当に気を配られた。時に、さつま芋などを差し入れて下さったことは、今でも忘れられない」(『忘れえぬ出会い』155頁)と。やはり、黒部さんにお世話になったことは一生忘れられないんですね。これが、池田先生たる所以だなとしみじみ感じます。

昭和21年8月17日、4番目のお兄さんが復員します。また、9月に2番目のお兄さんが復員

します。ですから、長男を除いて、池田先生のお兄さんたちが昭和21年に全員復員された。18歳の時です。

昭和22年、19歳になって、近所の20歳から30歳ぐらいまでの学生、あるいは、技術者、工員、公務員など、20人ほどで「協友会」という読書サークルを作った。そのサークルは、文化や芸術、政治、経済、哲学などといった、広範な知識の吸収に取り組むもので、そこに参加をし、毎夜のように集っては議論を交わしていた。当時、まじめな方は、このような経験をされていたようです。要するに、今まで自分たちが「真実だ」と思っていた規範が全て崩れ去ったので、当然、若者は「一体、何を信じたらいいのか」「何をすればいいのだろうか」ということを考えるわけです。いろんな書物に載っております。つまり、敗戦による既成の価値観が崩壊した。特に問題なのは、「愛国者とは何なのか」ということです。戦争の時に「愛国」と叫び、死んでいったわけです。しかし、「本当に国を愛するとはどういうことなのか」ということが議論になった。それから、「善悪の基準」です。「真実の正しい人生」についてです。池田先生は「こういうことに疑問を持つようになった」と書かれています。

みんなでそういう疑問を抱いて議論するわけですが、結局、結論が出ないんです。そうしたなか、やはり健康に優れないので、勤めていた昭文堂印刷を退社します。19歳の時は、しばらく自宅で静養を続けるという日々なんですね。この年の5月30日、長男・喜一さんの戦死の公報が届きます。昭和21年の1月11日、享年29歳。ビルマ、現在のミャンマーですが、そこで戦死したという公報が池田家に届くわけです。終戦以来、長男の復員を待ち侘びていた母・一の悲しみはとりわけ深く、父・子之吉もこれ以降、喘息や心臓が悪くなり、寝込むことが多くなった。この時のお母さんの姿を、池田先生はずっと語られますね。本当に戦争は駄目だ。1人の女性をここまで苦しめるというのは絶対にあってはならない。このお母さんの姿は、ちょうど昭和22年の話です。

(2) 創価学会への入会と活動

この年は、よくご存知のように、池田先生の人生にとって最も大きな転換期でもあるわけです。長男の戦死の公報が届き、お母さんの悲しむ姿を見、かたや既成の概念ではなく、新しい何かはないのかということを考えていた時に出会いがあるわけですね。8月14日です。小学校の同級生に誘われて、創価学会の座談会に協友会2人の友人を伴って出席をした。蒲田の三宅さんというお宅で開かれた座談会なんです。そこで、戸田先生と出会います。「立正安国論」の講義が終了し、戸田先生に紹介される。その際に、思索し続けてきた「正しい人生とはどういう人生か」「本当の愛国者とはどういう人をいうのか」「天皇をどう考えるか」との3点の質問を戸田先生にぶつけます。その3点の質問に対する戸田先生の明快なる回答を得た。それで、戸田先生のさりげない話し方、感銘直截な、確固とした真理がある、その戸田先生の屈託のない人柄に感銘を受けて、先生についていくことを決めたわけですね。これは、『人間革命』にも書かれている、有名なシーンなんです。実際にどういう会話がなされたのかという科学的裏付けは取れていません。小説『人間革命』には次のように書かれています。戸田先生が『青年らしく勉強し、実践してごらん』とおっしゃったことを信じて、『先生について勉強させていただきます』とお礼を述べ、更に即興詩を披露して感謝の意を表した」というストーリーです(『人間革命 第2巻』24頁)。それから、『私の履歴書』にはこのように書かれています。「正直言って、その時の私自身、宗教、仏法のことが理解できて納得したのではなかった。戸田先生の話聞き、姿を見て、『この人だ』と信仰の歩みを決意した」(『私の履歴書』78頁)と。

そして、8月24日、小平芳平教学部長らに付き添われて、東京中野にあります、日蓮正宗歎喜寮、昭倫寺ですね。ここにおいて、住職の堀米泰栄導師、この方は後の第65世の日淳猊下になりますが、この方に御受戒を受け、創価学会に入会します。9月に蒲田工業会に入社をし、仕事を続けます。

この出会いについて興味がありまして、いろいろなものを探してみました。とりあえず、池田先生のことを知るための基本的な文献は『聖教新聞』ですね。『聖教新聞』を見ていましたら、いろんなことが出てきたんです。

昭和32年10月18日の『聖教新聞』（第301号）には「私の初信当時」という、入信した時の思い出を幹部が語るというコーナーがあるんです。そこで、池田先生が語っているんですよ。昭和32年10月ですから、ちょうど信仰を初めて10年目なんです。その10年間を振り返って、池田先生が率直に語っているんです。これは新潟県長岡市で行われた指導会で、その席上、池田参謀室長が参加者の質問に答える話の中でのことです。『聖教新聞』には「自身の入信当初を振り返る、その動機を語っているのだから、ここで紹介する」と載っているんです。

どういう理由で信仰したのかということ、理由は3つあるんです。「第1に、これから長い人生を生きていく上において、明日の命も分からない、一寸先は闇ではないか。君には10年、20年先の生活に確信はあるのか、と言われた。僕はあると威張ったよ。(笑)それから、青年時代はまだいいけれど、“光陰矢のごとし”と言うように、アッという間に白髪の老人になってしまうのではないか。その時に自分は何のために人生を歩んできたか、何を目的として生きてきたか、と考えた時に、“我れ人生をあやまてり”と悲しんでも始まらないということ、君は考えないか」と問いかげられた。「次に、今は健康であるが、どういう宿命が自分の生命にせん在していて、いつ自動車にはねとばされたり、人に殺されたり、重病にかかったりするか分からないだろう。そういう宿命をどう打開するか、この信心以外に打開の道はありませんよ、と言われたんです」と語っているんですね。「もう1つは、死ぬという問題をどう解決するか、と言われたことです」と。そこで、池田先生は「フランスの有名な文豪ユゴーが云った言葉に、『人は生まれながらにして死刑囚の執行猶予をされたのと同じようなものだ』という言葉があります。死ぬということ、絶対なものです。この問題は、大臣になろうが、学者になろうが、絶対に解決できない問題です」と。そして、「その生きていくという生活の根本問題、それからすぐに老人になって死んでいかなければならない人生の目的の問題、自分の宿業、宿命、死ぬという問題について、全部解決できるのがこの信仰なんだよ、と言われたのです。私はなるほどなあと思ったんです」と池田先生は言われております。「青年はより高いものを求めていき給え、勉強し給えと言われて、いやだったが信心する気になったんです」と(笑)。それで、「一応、信仰したけれども、随分悩みました。『えらいことやっちゃったな、一生、南無妙法蓮華経と唱えるのか、みんな気狂いだと思うだろうなあ...』などと、ずい分苦しみました」と池田先生ご自身は語っているんですね(笑)。ただし、先生の胸を打ったことが1つあるんです。それは創価学会、特に初代牧口会長先生、現会長先生はじめ、20何名かの人々が軍部に真っ向から反対した。そのことについては非常に感銘を受けた、と言われています。それで、「何か真実の宗教があるのだろう」と思った。もう1つは、「会長先生の姿を見て、この宗教には迫害があるかもしれない。もし、難があつて退転するようなことなら、始めから信心をやめよう。信仰しきって行けるなら一生懸命信じていこうと、1年間、もんもんと悩んだ」と。これがちょうど、昭和22年。19歳の時の印象を10年後に語っているんです。

もう1つ興味深いものがあるんですよ。昭和34年2月6日(『聖教新聞』第369号)、「池田参

謀室長の指導から」です。質問に対する答えなんです。ここに、池田先生の入信の頃の気持ちが出てくるんです。「折伏と一口にいてもなかなか大変なのですが、参謀室長が折伏をはじめられたときは、どのようでしたか？」との質問が出ました。その質問に対して、「私が信心をしたのは満18歳のときで、小学校の同僚で女の人から折伏されたんです」と。前記の「入信当初を振り返る」では、小平教学部長から折伏されたという発言があったりと、いろんな人から折伏されているわけです。つまり、1人の人から折伏されて入信したわけではないという裏付けなんです。こういうのを追いかけていんです（笑）。続けて、「それが運命を変えちゃってました。いま思えば本当に幸せだと思いますね。“やります”と返事をしたものの、一生懸命なのに題目はあげるなんて、いやだなあー、と3日間ねられなかったよ」と（笑）。正直に語られている、これが池田先生なんです。誰に対しても、真正直に話されるんです。最近、大学へのお客様との会席に何回か参加させていただきましたが、本当に同じですね。誰の前でも同じです。「やるならやる。やめるならいまのうちと腹をきめて、先輩のいわれる通りにやりました。『折伏をしろ』というから、私は自分の友だちを10人ぐらいいよんだんです。信心してから間もなくのことですよ。一生懸命いきました。御本尊様の話を。一度なんかは、会長先生がわざわざ私のおよびした会合に出てくださいましたこともありました。しかしだれも信心しないのですよ。一生懸命やってもね。みな友達がはなれちゃうんだよ。私ひとりぼっちになっちゃって、これはえらいことをはじめてしまったと思っちゃった。だから、勤めに行くのでも、折伏をしてくれた家の前を通るのがいやだから、ずっと遠まわりして、帰日も遠まわりしていたんだ。別にだれも見えていないのだが... はじめはそんなものだ」という回答をされているんです（爆笑）。そして、結論では「はじめの3年間というものは、いわれた通り、気遣いみたいになって、一生懸命折伏をやりました」。いろんな失敗をしたが、「御本尊様の話をしていくのが折伏だから、ちゃんと功德が自分のところにもどってくるんですよ。ご飯を食べると同じように、当然、もう話をするのだという気持ちが大変だと思うんです」と言われています。

もう1つですが、「参謀室長が1日に沢山の題目を唱えて、闘争されたときのようすをお聞かせ下さい」という質問がありました。それに対して、「私が信仰したのは22年8月24日で、ちょうど3年目の25年8月23日に、自分にとって最大の三障四魔があったんです」と述べられています。その三障四魔を調べてみると、このちょうど8月の段階で戸田先生の事業が失敗するんです。誰も彼もが離れていって、池田先生だけが残っていくという状況の時の話なんです。これは大きなポイントの1つになっていくと思います。「その時、私も体が弱くて、随分やせていました。血タンはでてくるし、寝られないし、そのうえ家では信心に反対だ、親せきには行けないし... 一体どうしようかと思った。その時、私はどうか御本尊様、この仕事の苦しみからのがして下さいと、はじまったのです。それまでの3年間の信心なんて、なっていない状態なんです」と言われています。

ですから、何が言いたいのかというと、初めから「いいんだ」と思って入信したわけではない。しかし、一番の拠り所としていたのは戸田先生の存在だったということです。このあたりが非常に重要になってくるのではないかなと思います。この段階から、青年池田大作がぐっと大転換をしていくわけです。

昭和23年、20歳です。3月に東洋商業を卒業致しまして、蒲田工業会というところに勤務致しました。その傍ら、やはり向学の熱が冷めやらず、大世学院、現在の富士短期大学の政経科の夜間部に入学します。そして、20歳の時、初めて大石寺の夏期講習会に参加しました。188名参加です。9月13日、戸田城聖理事長による、第7期法華経講義の受講者となる。そういう

形で、池田先生の信仰活動が始まっていきます。

その出会いの中で、戸田先生はどういうふうに関わりを深めていったのかというと、20歳の時に蒲田工業会に勤務していますが、昭和23年の大晦日をもって円満退社します。その理由は、戸田先生が経営していた出版社、日本正学館に入社するためです。つまり、戸田先生が引っ張ったんですね。

昭和24年、21歳です。1月3日に日本正学館に入社しまして、少年雑誌『冒険少年』の編集に携わって来ました。ちょうど、昭和24年10月号から『少年日本』に変わります。その年の5月、『冒険少年』の編集長になります。

ここで、皆さんにご紹介したいのは、昭和24年ですが『大白蓮華』の8月号に、池田伸一郎というペンネームで「詩・若人に期す」を先生は書かれているんですね。今では『大白蓮華』に詩が載ることはほとんどないでしょう。その詩を今から読んでみますね。今、池田先生が作られている詩とどう違うのか、あるいは、同じなのか。

「若人に期す」

池田伸一郎

おゝ暁の天を衝いで 無数の^つ光彩^{ひかり}をはなち 皓々と太陽が昇る
その刹那の感激 驚嘆の生命のおのゝき 若人の心は斯の如し

若人よ 溢るゝ血潮の情熱と 尊く若き時代の人生を
いかに意義ある目的に 捧げしや
あゝ暁の鐘は鳴り響く

若人よ 二十世紀の原子力時代を 心の哲学で救えると思うのか一否！
陰謀と暴力の物の哲学で 人類が幸福になると信ずるのか 否！否！

そは人類を宇宙を救うは何か
血涙の限り絶叫せん 若人に！

生命の本質を説き 宇宙の本源をあかした 日蓮大聖人の大哲学に従わん
智ある者は知れ 人類を慈愛する者は動け 悠久の平和 広宣流布

若人よ ^{がんもく}眼目を開け 若人のみが大哲学を受持して 進む力があるのだ

『大白蓮華』第2号 昭和24年8月10日発行 11ページ

どうですか。一貫しているでしょ。この詩は21歳の時ですよ。これは貴重な資料だと思っているんです。創価大学の学生、青年に訴えかけているのと同じですね。

この後、ただひたすらに戸田先生から講義を受け、勉強に勉強を重ね、それから戸田先生の事業の手伝いと、これの繰り返しです。先程言いました、池田先生が書かれている「最大の三障四魔」が襲ってきたのは、昭和25年8月23日とされています。その日の前後を見ますと、この年に戸田先生は何をされたのか。戸田先生は前年に「東京建設信用組合」というのを作ります。ところが、この経営が苦境に陥るんですね。特にこの年昭和25年5月頃から非常に金回りが悪くなって、外交戦に悪戦苦闘の日々が続くんですね。池田先生は昼間、その仕事をし、

夜は座談会に行くという生活が続いていくわけなんです。7月には青年部会も開催されています。そして、8月22日、「東京建設信用組合」の業務停止が決定されます。戸田先生の事業が破綻するんですね。この後、池田先生が何をしたのかというと、その組合の残務整理です。時々、池田先生が「大変だったんだよ」と言われるは、この時の思い出が染み付いているわけです。この頃、事業面で苦境に立った戸田先生を守り支えていく。昭和25年のことです。そして、その2人が創価大学のことについて語るのが、奇しくもこの年の11月なんです。一番苦しい時の2人が、将来の創価大学の建設を語り合うんですね。有名な話ですが、この年の9月21日、池田先生は戸田先生に「古の 奇しき縁に仕えしも 人は変われど 我は変われじ」という和歌を贈りました。戸田先生からは「幾度か 戦の庭に 起てる身の 捨てず 持つは 君の太刀ぞよ」「色は褪せ 力は抜けし 吾が王者 死すとも 残すは 君が冠」と。この和歌を贈られた時は、事業が失敗して周りの人がなくなる時期なんですね。戸田先生の経営についてもしっかりと調べていくことは無論のことですが、今後の課題です。

その年の11月12日、牧口初代会長の7回忌法要に参加します。引き続いて、その会場で開催された第5回総会に参加しました。その時の『若き日の日記』には、「戸田先生、見ておって下さい。此の私を。必ず、先生の意志は、実現してゆきますと、先生の講演中、決意は漲る」と書かれているんですね。昭和25年頃に池田先生の精神構造が大きく変わり、戸田先生と一致団結して戦いが進んでいく、という形になります。

ここで話題を変えますが、実は、この段階で『聖教新聞』が出てきます。戸田先生のペンネーム「妙悟空」で第1回の『人間革命』が昭和26年4月20日、『聖教新聞』紙上で始まりました。この『人間革命』ですが、実は、池田先生が1度、『随筆 人間革命』で書かれているんです。「人間革命」という言葉は、戸田先生が初めて使ったわけではなく、池田先生が初めて使った言葉でもないんです。そこで誰が使ったのかというと、南原繁という人です。南原繁は、戦後すぐの東大総長です。東大総長が「人間革命」と言ったんですね。どこで言ったのかというと、昭和22年9月30日の東大卒業式で総長祝辞で、卒業生に人間革命を説いているんです。「人間革命と第2次産業革命」という祝辞です。「卒業生諸君、諸君が栄えある今日の卒業に至る在学3年の日は、実に、我が国未曾有の歴史的激変の時期であった」という文言から始まります。私たちの言っていることとよく似ているんですが、「我々は、この第2次産業革命においてこそ、第1次革命以来の失敗を繰り返すことなく、人間の主体性を取り戻さねばならぬ。さもなくば、人類の更に大量の物体化、ついに、破滅すらをも考え得られるのは、一人戦争においてのみのことではない。今、人類はこの革命の前に自滅か復興か、二者いずれを選ぶのかの岐路に立っている。この革命は人間の名において、人格の名において行われねばならぬ。人間、人格の価値を回復して、これを国家や権力と同じく、偶像化した技術や生産の上に優位せしめねばならぬ。それは如何にして適うであるのか。それにはかくゆう人間そのものの革命、人間革命を成し遂げねばならぬ」と。おそらく、これは戸田先生も読まれているだろうし、池田先生もよく吟味されたと思います。南原繁はクリスチャンですが非常に立派な方で、日本国憲法作成にも携わっていますし、もう少し突き詰めて言うと、天皇の戦争責任について、「天皇はその責任を取って退位すべきである」と戦後すぐに言った人でもあります。池田先生もご存知で、『人間革命』というのは、南原総長が言った言葉なんだ」と言っております。私はたぶん、池田先生は、こうしたことを思索のきっかけにしながら、仏法を通じて「どうすれば人間は幸せになるのか」を考えていったと思います。南原繁も同じだと思います。共通部分はあるんですね。南原繁著『人間革命』(東大新聞社出版部)の本はなかなか無くて、ようやく見つけ出したんです。

この本は昭和23年3月25日発行されました。

(3) 会長時代

池田青年室長から始まって、戸田先生の会長推戴と池田先生の年譜を追いかけていくと、毎日のように活動して、人を激励する。その繰り返しですね。これは会長になってからも同じです。連日のごとく人に会い、連日のごとく激励する。日本全国中を走り回っています。

1958（昭和33）年に戸田先生が亡くなられ、1960（昭和35）年に第三代の会長推戴があります。そして、会長としての活動が更に激しくなっていきます。その中で、ちょっとしたエピソードというのは、1960年10月、会長就任から5年目ですけれども、アメリカの海外指導に行かれるんですね。それ以降を調べてみますと、随分、多くの海外訪問をされております。50数カ国を周られて激励されております。

(4) 名誉会長として

1977（昭和52）年に会長を勇退されて名誉会長としての活動が始まります。活動されている内容は、一貫して同じです。しかし、ここからの研究には全然手がついていません。あまりにも活動が広範に渡り、追いつきません。今後、検討していかないといけないんですが、「どこに何回行った」というようなことも調べてもおもしろいかなと思っています。しかし、なかなか上手くいかず、量が多すぎて時間が足りません。ただ、言えることは、日本全国津々浦々を回られているということです。会員の激励のために、とにかく走り回っていると実感します。

(5) 創立者として

表2を見て下さい。今年、「名誉学術称号」が160になりまして、今日の新聞によりますと「名誉市民号」が370になりました。これを追いかけるのも大変なんですよ。とりあえず創価大学なので、創立者の「名誉学術称号」を掲げてみました。興味があったのは年度別です。どのような変化をしているのかということです。

1975年、第1号の名誉博士号はモスクワ大学からです。ご覧いただくと、21世紀に入ってから名誉学術称号の授与の数が大幅に増えてきているということです。これは21世紀になって池田先生の活動が活発になったということではありません。むしろ、その前の80年代から90年代にかけての、池田先生のさまざまな活動が評価されてきたといいと思います。

名誉学位というのは、非常に大変なんですよ。池田先生は簡単に語っておられますが、これは推薦されて、大学には教授会というのがあるんですが、教授会で審議して、審議の結果を大学を運営している理事会に申請して、理事会の申請が通らないと名誉称号は出ないんです。かなり年数をかけて、池田先生の業績や活動を調べた上で出しているんですね。

博士号自体も非常に大変で。私は今年の3月にやっと博士号を取れました（拍手）。自慢で言っているわけではなくて（笑）。自分の研究で博士号を取るのに20年近くかかるんです。池田先生は「博士号160個だよ。褒めてよ」と冗談で仰ることがありますが、こんなことを言っただけですが、本当に心底から讃えないといけないんですね（笑）。名誉博士号が160というのは、大学にいる者から見ると大変なことなんです。

これまでの活動、色々な著作、各大学での講演、SGI提言を20数年間書かれていること等、世界は見ていますよね。その意味で、実践と行動、思想が高く評価されているのは事実だと思います。

ただ、今度は私たちがこれをどのように丹念に追いかけていくのが課題なんです。これは大変ですね。私が創価大学に在る間にできるかどうか。とにかく、若い方々にバトンタッチをしながらやり続けるしかないと思います。

5. 池田研究の現状

(1) 中国における池田研究

センター紀要の『創価教育研究 第3号』に高橋強副センター長が「中国における『池田思想』研究の現状」という論文を書いております。今日はその中のことを簡単にまとめて、また、新しい情報も若干付け加えてお話ししたいと思います。

まず、中国での池田研究で先鞭をつけたのが、北京大学にある「池田大作研究会」です。北京大学は中国随一の名門大学です。日本でいえば東大です。2001年12月、「池田大作研究会」が誕生しました。創立者の宗教観、哲学観、教育思想など、独自の人間学論を研究しています。研究会の会長は女性で賈先生かです。日本の慶応大学を出られて研究を続けていました。賈先生から『創価教育研究 第3号』に寄稿論文として、「池田大作先生と教育」を頂戴致しました。今後、こういう研究が中国での様々な研究会で出てくると思います。

それから、湖南師範大学にある「池田大作研究所」です。大学に「師範」と付くことからおわかりになるでしょうが、この大学は教育者を養成する名門大学です。2002年1月に研究所ができました。湖南師範大学の劉湘溶りゅうしょうりゅう学長が所長です。昨年ですが、『論文集 池田大作思想史研究』を出しました。中国は非常に進んでいるということです。

それから、安徽大学あんきでは「池田大作研究会」が2003年4月に発足しています。池田先生の人道主義、宗教理念、人間学、歴史観などを研究する機関として、安徽大学の哲学学部あんきに設置されました。全学的なプロジェクトとして現在、さまざまな研究が推進されています。

それから、一番新しいものですが、広東省にある大学で、肇慶学院ちやうけいに「池田研究所」ができました。活動を開始しています。

今、言った4つの大学が大陸の大学なんですね。台湾の方では、中国文化大学に2003年9月に「池田大作研究センター」ができました。林彩梅りんさいばい前学長がセンター長であります。

中国では台湾も含めまして、かなり様々な研究が進んでいる状況です。

(2) 諸外国における池田研究

1つ目に、アルゼンチンにあるローマス・デ・サモラ大学で「池田哲学普及常設委員会」が2003年2月にできました。この大学にある東洋哲学研究所の中に設置されました。所長はトマ副総長で、この方が委員長を勤めておられます。講演会やセミナーをアルゼンチンで、継続的に開いているそうです。

2つ目に、インドにある国際詩人アカデミーで「池田大作博士国際詩歌センター」があり、2000年9月にできました。

3つ目に、ガンジー非暴力開発センター。2002年1月2日に「池田価値創造センター」が設置されました。「人間の生命の価値、理想の価値、希望の価値の宣揚に勤める人々の連帯を築きたい」と。これがガンジー非暴力開発センターの「池田価値創造センター」の目的になっています。

このように、池田先生のこれまでの業績がさまざまな人々の中で、段々と具体的に花開いているなと思います。ただ、問題は、池田先生の平和思想や考え方、教育思想というものが、一

体、池田先生の中でどのように芽生え、それがどういう形で具体化していったのかを知ってみたい。それを知ることでできる資料を得たい、集めたいというのが、私たちの願いなんです。

(3) 創価大学における池田研究

創価教育研究センターは冒頭で紹介しましたように、2000年11月16日に開設されました。具体的には、『創価教育研究』という紀要を発行しています。

『創価教育研究』の創刊号では、論文を3本収めています。それから、創価教育研究センターが毎年、大学で開催している講演会をまとめ収録しています。講演会に参加したいと思っても、遠方の方は参加できませんし、その講演会で話された中身が資料として重要だったりするんです。なぜかというと、ご自分が体験されたことを話される講師が多く、その講演を記録として残すことを1つの方針としました。

翌年の『創価教育研究 第2号』に収録した講演では、聖教新聞社の松島淑さんの「グレイトダイアログの源流——トインビー対談」があります。これはトインビー対談の30周年記念として開催されたものでした。その講演では、池田先生がトインビーと対談された意義などが紹介されました。また、水戸昭さんの「歴史的対談を写す」は、当時のトインビー対談を聖教新聞社の写真記者として見つけた経験が話されています。また、篠原誠顧問(故人)は「戸田城聖と学生——東大法華経研究会50周年記念」と題して話されました。特別な講演といえるものは、角山栄先生の「私の見た草創の創価大学」です。この先生は、和歌山大学の名誉教授でございまして経済史が専門です。創価大学ができたときに教員の数が足りなくて、そこで応援をお願いした先生なんです。日本でトップクラスの経済史の先生です。角山先生が創価大学で講義をされた時の印象を語ってくれました。「創価大学での講義は非常に気分がいい。みんな熱心に聴いている。そんな大学は創価大学が初めてだ」と。

それで、『創価教育研究 第3号』になりまして、私が巻頭言で「池田研究への新たな地平」を書かせていただきました。先程もお話しましたが、いよいよ池田研究を開始することになりました。これまでの当センターの活動の変化が、この『創価教育研究』の目次から読み取れると思います。

夏休みが終わって、創価大学は9月16日から後期が始まります。9月に講演会を2回ほど予定しております。1つは、今年、池田先生とゴルパチョフとの対談が30周年です。その対談についての講演会があります。もう1つは、松下幸之助との対談も30周年なんです。この講演では、「松下側から見た創立者池田大作がどのようにうつっているのか」についてお話しいただこうと思っております。先程、紹介した創立者著作の「翻訳書籍1300冊」展も継続しております。まだ手に入っていない書物がありますので、日々、この冊数は増えていくと思います。

6. 今後の課題

さて、最後になりましたが、今後の課題について少しお話ししたいと思います。よく言われることですが、「歴史研究における評価は60年単位である」と。つまり、ある1つの出来事が60年経たないと、その歴史的評価は固まらないという意味なんです。簡単に言いますと、例えば、明治維新がありました。これは1868年です。この年に、日本における政権交代という以上の大きな変化がありました。明治維新が歴史の対象として、卒業論文のテーマとして、東京大学文学部国史学科で取り上げられるようになるのは、60年後の1928年、つまり、昭和に入って

からなんです。そうならないと、1つの出来事に正しい評価を下せないというのが、一応、歴史研究の基本的なスタンスなんです。そうすると、私たちはいったい何が出来るのか。私たちが池田先生のような実践、思想、哲学に対して、正しい評価を下せるのだろうか、という自問自答をせざるを得ない。

そこで考えつくことは一体何かというと、もし評価は60年後にあるとするならば、その時にきちっと正確な評価ができるように、私たちはその評価の材料を調べておくことが大事ではないのか。例えば、今日、紹介した『聖教新聞』に書かれている、池田先生ご自身の人生を振り返った話をやはり丹念に集め、それを残していくことは大事ではないかと思えます。

したがって、「本格的研究に必要な資料の収集と事実確認」をしておかないといけないと思っています。その資料とは、池田先生ご自身が書かれたもの。1つは著作物です。すごい量の本が出ています。まだ全部集めきれっていません。それから、海外著作ですね。また、一般の新聞、雑誌への寄稿文ですね。それらを集めると、すごい量になります。もっと辛いのは、『聖教新聞』、『大白蓮華』など、いわゆる創価学会の諸機関から発行されたものに書かれているもの。その分量は想像できないでしょう。しかし、これらが池田先生を研究する上での基本的な資料なんです。これ以外にまだありますよ。例えば、8ミリの記録映画やレコード、テープ、写真など。本当に気の遠くなるような作業です。とにかく、それを少しずつやっております。50年後、100年後のルーツを作っておこうと思えます。つまり、池田先生の研究は、創価大学でそれなりにまとめておく必要がある。そのために、今後、この仕事を引き継いでいってくれる若い研究者を育てていかなければならないとも思っております。今後は、実際に池田先生とお会いしたことのない方々が多くなっていくわけであり、彼らが池田先生のことを理解するにはかなり深いところまで知らないといけない。その材料をどこまで集められるのだろうか。そして、それを集めた上で、どこまで次代の研究者たちに伝えていけるのか、ということが私たちの使命だと思っています。

現実、今、池田先生は創価大学のキャンパスを回られています。学生たちは池田先生と出会っております。それをどのようにして後世に残していくのか。それが創価教育研究センターのもう1つの大きな使命ではないかなと思っています。

池田研究が今後、どうなっていくにせよ、人類共有の財産になっていくはずで。それと同時に、創価大学が今後どうなっていくのか。また、どうなっていかなければならないのか。それがどのように評価されていくのか。一重に資料にかかっていると思えますので、私たちは今後も努力していきたいと思っています。本日は、大変にありがとうございました（大拍手）。

*本稿は2004年8月29日に開催された、「第31回 夏季大学講座」での講義を加筆訂正したものである。

<表 1>
池田大作研究関係書籍目録

著者名	書名	出版社	出版年代	備考
高瀬 広居	人間革命をめざす 池田大作 その思想と生き方	有紀書房	1965	
室伏 高信	どんな日本をつくらうとすのか 池田大作	全貌社	1967	
五島 勉	現代の英雄 日本が羨すぎる5人の男	大和書房	1968	他の4人は、三島由紀夫、小澤征爾、本田宗一郎、黒澤明
菊池 到	小説 池田大作	徳間書店	1969	
小林 正巳	現代人物論 池田大作	旺文社	1969	旺文社新書
奥 忠邦	池田大作論	大光社	1969	
五島 勉	生命(いのち)の若者たち-池田会長と一千万人の記録-	大和書房	1970	
二反長 半	若き池田大作	集英社	1971	改訂版が1976年に発刊された。
五島 勉	池田大作という人	若木書房	1971	
池田 大作	私の履歴書	日本経済新聞社	1975	
大原 照久	訪中三たび -池田会長とともに-	第三文明社	1975	
外山 四郎	評伝 池田大作	国際商業出版	1976	
中江 克己	池田大作の建設書	泰流社	1980	
吉村 元佑	池田大作 思想と行動	三友書房	1980	
奥 忠邦	池田大作の軌跡-1	徳間書店	1980	
吉村 元佑	池田大作 平和への旅	三友書房	1981	
吉村 元佑	人間の中へ 池田名誉会長の激励行	第三文明社	1982	
柳田 邦夫	創価学会名誉会長 池田大作は何を考えているのか	KKロングセラーズ	1983	
吉村 元佑	人間の中へ Vol.2 池田大作と民衆運動	第三文明社	1984	
奥 忠邦	池田大作の軌跡-2	徳間書店	1984	
吉村 元佑	人間の中へ Vol.3 池田大作と南米の友	第三文明社	1985	
松山 善三	あゝ人間山脈 「フォーエバーセンセイ」取材の旅	潮出版社	1985	
吉村 元佑	人間の中へ Vol.4 池田大作と北米の友	第三文明社	1986	
吉村 元佑	人間の中へ Vol.5 池田大作と関西の友	第三文明社	1989	
吉村 元佑	人間の中へ Vol.6 池田大作と「生命の世紀」	第三文明社	1993	
N. ラダクリシユナン	池田大作 偉大なる魂	鳳書院	1994	栗原淑江・訳
ウラジミール・トロローピン	出会いの二十年	潮出版社	1995	
吉村 元佑	人間の中へ Vol.7 池田大作と求道の友	第三文明社	1996	
木村 恵子	人間池田大作 私の見た素顔	潮出版社	1999	
N. ラダクリシユナン	池田大作 師弟の精神の勝利	鳳書院	2000	栗原淑江・訳
南開大学周恩来研究センター編	周恩来と池田大作	朝日ソノラマ	2002	西園寺一見監修、周恩来・トウエイチョウ研究会訳
蔡 徳麟	東洋の智慧の光 池田大作研究	鳳書院	2003	
中澤 孝之	ゴルバチョフと池田大作	角川書店	2004	

<表 2>
創立者名誉学術称号授与資料

西暦	名誉博士	名誉教授	その他	年合計
1975	1			1
1976				0
1977				0
1978				0
1979				0
1980				0
1981	1	1		2
1982				0
1983				0
1984		2		2
1985				0
1986				0
1987		1		1
1988				0
1989				0
1990	2	1		3
1991	2	1		3
1992	2	1	1	4
1993	6	3		9
1994	3	3		6
1995	3			3
1996	5	2		7
1997	3	3		6
1998	9	3		12
1999	6	6		12
2000	17	9	1	27
2001	5	12		17
2002	9	13	1	23
2003	6	5		11
2004	5	6		11
合計	85	72	3	160